

# 一八世紀ドイツにおける日本観の変容

——E・ケンプファーの「鎖国論」と

C・W・ドームによる「鎖国論」批判をめぐる——

岡野 薫

## 一 はじめに

ケンプファー（一六五二—一七一六）<sup>〔1〕</sup>は、旅行家、日本研究者として広く知られた人物である。彼は一六九〇年から二年間日本に滞在し、二度の江戸参府を行った。ケンプファーの日本に関する著述としては、『廻国奇観』<sup>〔2〕</sup>（一七二二）に収録された論文および『日本誌』<sup>〔3〕</sup>（一七二七）がある。これらは一八世紀ヨーロッパにおける日本情報の信頼度の高い情報源として頻繁に用いられ強い影響力を持った。<sup>〔4〕</sup>これらの著述の性格は、内容的にみて「資料集」「紀行文」「文明批評」の三つに大別することができる。<sup>〔5〕</sup>資料集的、紀行文的性格を代表する著作は、彼の名著『日本誌』であり、文

明批評的著述の代表的なものとしては、『廻国奇観』所収の「鎖国論」<sup>〔6〕</sup>が挙げられる。ケンプファーが「鎖国論」の中で展開した「鎖国」肯定論は一八世紀から現在に至るまで、その賛否をめぐって多くの議論をよび、こうした議論に着目した先行研究も少なくない。<sup>〔7〕</sup>しかし、本稿の意図は、「鎖国」をめぐる議論そのものを吟味するというより、ケンプファーの文明批評家としての側面に光を当てつつ、なぜ彼が「鎖国」肯定論を展開したのか、彼の平和理解、ひいては彼の日本理解の視座を検討することにある。本稿では、こうした意図をふまえ、一八世紀ドイツにおける思想家たちの日本観や中国観を参照することで、彼の日本観の特質と平和思想における位置を確認したい。

## 二 「鎖国論」と編者ドーム

「鎖国論」は、キリスト教的な普遍主義に立脚した「鎖国」否定論から筆を起こしつつ、日本の地理的条件、物産、国民の気質、そして日本の歴史、学問、芸術、宗教、医学、法律、政治体制といった日本の国状を多面的に紹介しながら、日本の「鎖国」が賢明な政策であることを論証している。これに対し、『日本誌』の編者ドーム（一七五〇—一八二〇）は、「鎖国論」における日本の評価に二つの問題点を見いだし、これを批判した。第一の批判は「鎖国論」の日本観に客観性が欠如しているという指摘、そして、第二の批判は同論文が未整理で矛盾した主張を含むというものである。例えばドームは、ケンプファーによる日本の裁判制度の記述にその矛盾を見い出した。ケンプファーは日本の裁判が迅速に行われることを賞賛しつつ、他の箇所では日本の法律が極めて厳格で、貴族以外の違反者は全て死罪をもって罰せられると記しているのだが、ドームは全ての犯罪を同列に置くような日本の裁判制度は賞賛に値しないと断言している。ドームによる一連の批判は、ついにケンプファーの論文に自らが「あとがき」を付す契機ともなった。

ドームはプロイセンの外交官として、また啓蒙主義的知識人として数多くの業績を上げた人物である。特に、彼の名著『ユダヤ人の市民的改善について』(Über die bürgerliche Verbesserung

der Juden, 一七八一、一七八三)は、「あらゆる分野におけるユダヤ人の同権を要求し、一七九一年フランス、一八一二年ドイツのユダヤ人解放令の素地を作り出した」著作と評価されるほどである。だが、ドームが若い頃に記した「あとがき」は、彼が後に政治家として残した功績の背後に翳みがちである。しかし、彼が『日本誌』を出版する以前に、すでにいくつかの地理学的な著作の翻訳に従事しており、『日本誌』を刊行するまでに「アジア地域における統計学的地理学者として極めて高い評価を獲得した」というプロイティガムの指摘をふまえるなら、ドームの日本観を等閑視すべきではないだろう。また、彼の「あとがき」は『ドイツ百科事典』(一七九二)の「日本の哲学」の項目に一部転載されている<sup>(1)</sup>。このことも当時のドイツにおけるドームの日本観の位置を示唆するといえよう。

## 三 平和への礼賛

一七世紀末のフランスでは、イエズス会士の報告を通じてもたらされた中国情報によって中国が知識人たちの注目を集めるようになった。ドイツでは、ライプニッツ(一六四六—一七二六)が『最新中国情報』(一六九七)で中国人の倫理学と政治学に言及した。その中で、彼は中国人が人間同士の争いを収める優れた手段を発見したと述べ、彼らの道徳を高く評価した。ライプニッツは中国人が優れた道徳を持ち、争いを好まない国民だと考えたので

ある。彼は同書の冒頭でヨーロッパと中国を比較し、中国人が戦争の技術や知識において西洋人に劣っていると記した。しかし、彼は、このことが中国人の無知ではなく人間の攻撃性が生み出すものを忌み嫌った結果であって、こうした態度はキリスト教の高尚な教えに劣らぬものだとして中国人を擁護した。ライブニッツは、こうした中国人の態度が、この地上に単独で存在するならば賢明なものであるとしながらも、現状は善人でも悪の力が降りかからぬように戦争の術を身につけねばならないと提言している。つまり、彼は、現状では軍事力が不可欠ではあるが、中国人の道徳や平和を好む態度は称賛に値するものであった。「現状では軍事力が必要」であるという彼の発言は、当時の彼の境遇、そしてドイツの置かれた状況を参看することでその暗示するところがより明瞭となる。例えば、彼は一六七二年、ルイ一四世にエジプト遠征計画を進言するため赴いた。この計画はフランス王の度重なるドイツ侵攻の矛先を東方へそらすという意図で案出されたものであったのだ。<sup>15</sup> さらに、彼は、一六八三年に「最もキリスト教的な軍神」(Mars Cristianissimus) という論文を出版した。ライブニッツの伝記的研究によれば、同論文は、ライブニッツがフランスを批判した論文中で最も強い論陣と溢れる敵意を示したものであるとされる。<sup>16</sup> こうみてくると、前述した彼の発言は、中国に対して向けられた発言でありながら、同時に彼と彼の故国の状況を反映していると言いうるのである。

ケンプファーの著作中にも時代性を反映した箇所が多数見られることはしばしば指摘される。<sup>16</sup> その中で、ライブニッツとの同時代性で注目すべきは『日本誌』の序文である。ケンプファーは、自分がベルシャからさらなる旅を決心した時、祖国はまだ「極めてキリスト教的な敵」や「極めて非キリスト教的な敵」の侵略に悩まされていたと記した。そして、彼は、こうした戦乱に巻き込まれるより、旅の危険に耐える方がよいと考えたと述べている。<sup>17</sup> 彼の戦争への憂慮は「鎖国論」の中でも随所に散見される。そして、こうした問題意識が同論文における「日本の平和」の称賛と密接に関連しているのである。

ケンプファーは「鎖国論」の中で、君主たちの飽くなき領土拡張欲を批判し、もし自然が人間のあらゆる欲求を満たし、全ての民族が自国の境界内で満足するならば、町や家屋の破壊、虐殺、国土の荒廃、教会や住居の取り壊しが起こることもなかったであろうと述べる。彼がこの箇所で念頭に置いているのは明らかに故郷ドイツの状況であろう。彼はヨーロッパの君主たちに不満をもち、また戦乱に不安を抱いていたために、日本の対外政策の一つの理想を見いだした。このことは、ケンプファーが日本の平和と「鎖国」政策を、他国が見習うべき「最も幸福な状態の頂点」として称賛したことによく表れている。

ここまでケンプファーの「日本の平和」に対する見解をライブニッツの中国観を参照しつつ論じてきた。両者は平和の持つ価値

をいち早く見いだし、それを自身の日本観や中国観に反映させたという点で共通している。そして、それはまた彼らが生きた時代性と密接にかかわっていたのであった。しかし、両者の見解が侵略や戦争の体験と結びついたものであったため、時代の変遷とともに彼らの日本観、中国観は徐々に一般性を失い、理解し難いものとなっていったのである。ドームが、「鎖国論」の記述には客観性が欠けると指摘したこと、そして、別の箇所で「われわれヨーロッパ人は、今日では東方世界の知識をかつて以上に正しく評価できる」と述べたことは、このような時流の変化を如実に物語るものである。次節では、七〇年あまり後に、ケンプファーの「鎖国論」に「あとがき」を添え、ケンプファーの「鎖国」肯定論に批判を加えたドームの日本観を分析する。

#### 四 平和と停滞

ドームは「あとがき」の中で、日本の学問や芸術、日本人の幸福、日本の歴史、日本の「鎖国」政策の妥当性と有益性の四点を中核として、「鎖国論」の日本観に批判を加えている。彼は日本の政策について、政策としての妥当性を認めつつも、それが政治的に有益であることは別の問題であるとした。その上で、彼が「あとがき」で検討すべき問題は「鎖国」の政治的有益性であるとした。まず、ドームは日本が「鎖国」によって平和を享受しているという情報をケンプファーと共有し、日本の平和を認めた。

しかし、彼の日本観がケンプファーと際違った違いを見せるのは、ドームが日本の平和を消極的にかつ評価していないことである。彼は、日本の政策が平和という利点以外では、文化や啓蒙における進歩、楽しみや生産の拡大、専制政治の脱却などの諸点において、日本国民にとって大きな不幸であると結論するのである。すなわち、ドームは、日本が平和を享受することより日本が文化的に高度な段階に達することの方が重要だと考え、政治的な有益性とはこうした文化的進歩を目指すところに見いだされるべきと考えたのであった。つまり、「鎖国論」でケンプファーが平和を絶対的な価値を有するものとしたのに対し、ドームは進歩という価値を平和の上位に位置づけたのである。

「あとがき」全体の論旨から見れば、ドームの「鎖国」否定論は次のように位置づけることができる。日本は文化のさまざまな面でヨーロッパに劣り、その理由は日本が諸外国との交流を断っているからである。しかし、日本の「鎖国」は極めて強固な政策であるため、日本が自ら諸外国との交流を行うという展望は開けず、それゆえ、日本は外国の圧力によってしか開国できない。そして、日本を開国させることは日本人と外国人双方の利益となる。以上が「あとがき」の論旨からみた「鎖国」否定論の位置づけである。歴史学者の森義信はドームの「あとがき」とモンテスキューの『法の精神』を比較し、ドームの「鎖国」否定論がモンテスキューの影響下にあることを明らかにした。また、森はドームの「外

庄による開国の必要性」という主張をドーム独自のものと位置づけ、日本の対外交渉史の観点からその先見性を評価している。一方、現代的な視点からすれば、ドームの主張に植民地主義を正当化する理論を見いだすことも可能である。<sup>19)</sup>しかし、日本観の研究者のカピッツァが指摘するようにヴィーラント（二七三三―一八一三）が日本の「鎖国」政策に批判的発言を行う時代にあつて、また、後述するヘルダーの見解をふまえるならば、ドームの主張は、むしろ一八世紀後半の時代思潮を強く反映したものと見える。こうした時代思潮の中で、ドームの自信に満ちた断言、すなわち、我々はケンプファーよりも正しく東方世界を評価できるという発言が醸成されたのである。

ヘルダー（二七四四―一八〇三）は、ドームのおよそ一〇年後に、『人類史の哲学考』（二七八四―一七九二）で東アジアへの言及を行い、日本には全く進歩が見られないという見解を示した。同書では日本の記述は僅かしか見られない。恐らく、ヘルダーは日本が中国と類似した文化を持った国で、日本については中国に対する記述で事足りりとしたためと考えられる。<sup>20)</sup>それでは、ヘルダーは中国についてどのような記述を行っているのだろうか。

まず、ヘルダーは中国が豊饒な国土と、満ち足りた秩序正しい生活、そして優れた政治体制を有しているとした。そして、ヨーロッパの人々がかつてこの国に讃辞を呈していたことを回顧しつつも、進歩が停滞した中国に批判の眼差しを向けるのである。彼

は中国に対して「進歩の停滞」という観点から多くの批判を行ったが、中でも中国の政治制度が幾多の戦争や政権交代にもかかわらずその制度が無変化であることを指摘した。<sup>23)</sup>こうした指摘はドームの「あとがき」に同様の指摘が見られる点に注目すべきだろう。ドームによれば、東方世界の諸王国の歴史はあらゆる時代を通じていつも型どおりの革命を描写しているとし、彼らの歴史を紐解く者は同じ歴史を異なった名前で読んでいる気になると述べた。ヘルダーやドームは、日本や中国の歴史に言及し、過去の革命や戦争が進歩を生み出さなかったことを指摘しているのである。ヘルダーは『人類史の哲学考』の中で発明精神の欠如、男性的な力や名誉の欠如などといった中国の欠点を列挙しつつ、中国の平和に対しては「戦闘的な精神と同じく思索的な精神も、暖かい暖炉で眠り、朝から晩までお湯をすすっている国民にはほど遠いものなのだ」という批判を行った。彼は中国の生活習慣と中国の平和を関連させ、その怠惰を戯画化してみせたのである。ヘルダーにとつて中国の平和は、かつてライプニッツが見いだしたような輝きを失い、むしろ怠惰な停滞性を象徴するものとなつたのであつた。

ここまで、ドームの日本観とヘルダーの中国観を対照して論じた。両者は日本と中国が平和であることを認めながらも、この平和が進歩を阻害する一因であつたという見解を示した。さらに、両国の戦乱が創造的な進歩につながらなかつたことにも批判の眼

差しを向けたのである。このような戦争と創造を関連づける思考の中で、ドームの次のような主張がなされるのである。彼は、日本の内戦が多くの不幸をもたらしたことは言うまでもないが、圧政にさらされるよりは活動的で偉大な行動をとるものだと述べ、怠惰な平和よりは創造的な戦争を肯定したのである。もっとも、ドイツの文化人たちが、フランス革命の勃発当初、これを「理性の革命」として一様に好意的に歓迎したとされることを想起するならば、創造的な破壊が肯定的にとらえられたことに時代の反映を見いだすことができるかもしれない。

## 五 結 語

以上、ケンプファーとドームの日本の平和に対する記述を中心に、ライプニッツやヘルダーの見解を参考にそれぞれの日本観・平和観を比較考察してきた。本稿で取り上げた人々は共通して日本や中国の「平和」を認めた。ケンプファーやライプニッツは日本や中国の平和を称賛し、ドームやヘルダーはこれを非活動的で、進歩を阻害するものとして消極的な価値しか見いださなかった。三〇年戦争後のドイツの惨状、ドイツ周辺の強国による度重なる侵略を自ら体験したケンプファーは、外国の干渉を遮断することでも実現した日本の平和を高く称賛した。しかし、日本の専制政治が批判され、進歩が称揚されるほぼ七〇年後の時代に生きたドームは、平和を犠牲にしても、それが人間精神の進歩に寄与するな

らばこれを評価する立場にあった。こうした立場からすれば、日本の平和は進歩を阻害する原因として批判の対象となったのである。

これまで論じてきた点をふまえるなら「日本が平和である」という情報自体は変化していないことになる。しかし、新しい情報によることなく評価のみを変化させようとすれば問題点がないわけではない。ドームにとって日本が停滞し、開国が日本人の利益になることを主張するためには、日本がヨーロッパにさまざまな分野で劣ること、そして、日本人の境遇が不幸であることを証明しなければならなかった。その証明のために、例えば、彼は、ケンプファーが日本人の名誉心を示すために挙げた日本人はたやすく自殺するという情報を、日本人が不幸であることの逆証明として使用したのである。これはドームが自らの結論を根拠づけるためにケンプファーの情報を恣意的に利用した一例である。つまり、ドームは「鎖国」否定論として首尾一貫した論理を展開したが、同時に自らの主張に適合するように情報を偏向して用いる傾向もある。それに対し、ケンプファーは、前述したドームの指摘からもうかがえるように、時として「矛盾」と理解されるような情報も提示しつつ自論を展開した。むしろ、「鎖国論」は首尾一貫した論旨を重視するというより、多彩な日本情報を提示することを主たる目的とした論文であるといえる。もちろん、この相違は実際日本を訪れたケンプファーと文献のみに依拠したドームの違い

といえるかもしれない。いずれにせよ、ケンプファーのように「平和」を静的な状態と解するか、あるいは、トームやヘルダーのように進歩を視野に入れた動的な状態を構想するかによって、日本をめぐる文明批評のあり方が異なってくる。その意味では「鎖国論」とその「あとがき」は、平和観を軸としながら、異文化理解・評価のあり方をめぐる現代の問題も提起しているといえないだろうか。

- (1) 日本では「ケンネル」と通称される。本稿では原音表記に近く「ケンプファー」と記述する。
- (2) Kaempfer, Engelberto: *Amoenitatum Exoticarum Politico-Physico-Medicarum Fasciculi V, Variar Relationes Observationes & Descriptiones Rarum Persiarum & Uterioris Asiae*, Reprint of the 1712 ed., (Teheran 1976).
- (3) 『日本誌』は当初 *History of Japan* と日本語タイトルで英訳で出版された。その後、ユーム版 *Geschichte und Beschreibung von Japan* 挿紙題による *Heutiges Japan* などと出版された。この挿紙題による *Heutiges Japan*, Wolfgang/Terwiel, Bernd J. (Hrsg.): *Heutiges Japan*, Bd. 1/2 (München 2001)。○「カハル」はユーム版 (S. 3-72) を参照。
- (4) Vgl. Kapitza, Peter: *Engelbert Kaempfer und die europäische Aufklärung* (München 2001).
- (5) 中直一著「ケンネル『日本誌』と編者ユーム」(大阪大学大学院言語文化研究科編)『ドイツ啓蒙主義研究』(大阪大学出版会 二〇〇一年) 三四-三十五頁。

- (6) Kaempfer, Engelbert: Beweis, daß im Japanischen Reiche aus sehr guten Gründen den Eingebornen der Ausgang, fremden Nationen der Eingang, und alle Gemeinschaft dieses Landes mit der übrigen Welt untersagt sey. in: *Geschichte und Beschreibung von Japan*, Bd. 2, hrsg. von Ch. W. Dohm, unveränderter Nachdruck des 1777-1779 (Stuttgart 1982). 本稿における「鎖国論」の引用、要約はこの著作による。ユームの「あとがき」(Nachbemerkungen des Herausgebers)も同書 (S. 414-422) を典拠とする。また、翻訳に際しては、今井正訳『新版』改訂・増補日本誌-日本の歴史と紀行』第七分冊(霞ヶ関出版 二〇〇一年)「二二三-二二三頁。小堀桂一郎訳『鎖国の思想』(中央公論社 一九七四年)「六一-二二四頁」を参照した。「鎖国論」は最初『廻国奇観』に収録され、後に英語版『日本誌』ユーム版『日本誌』の付録として、それぞれ英訳、独訳られて収録された。本稿ではユームの日本観と対比するところ、観点からユーム訳「鎖国論」を底本とした。
- (7) 日本では前掲の小堀(二二五-一九八頁)の研究が広く知られている。その他、牧健三著『西洋人の見た日本史』(弘文堂 1949年) 二二五-三三九頁、Kapitza (2001), S. 23, 28, 40f.
- (8) Vgl. *Neue Deutsche Biographie*, Bd. 10 (Berlin 1974), S. 729f. 中「前掲書」三〇-三三頁参照。
- (9) *Deutsche Biographische Enzyklopädie*, Bd. 2. (München 1995), S. 582.
- (10) Brättingam, Herbert: Dohms Haltung zu Kaempfers Japan Werk, in: *Engelbert Kaempfer*, hrsg. von D. Haberland (Stuttgart 1993), S. 332. 氏の指摘は「一十七六七年までのユームの著述を分析した結果である」。

- (11) Japanese Philosophie, in: *Deutsche Enzyklopädie oder Allgemeines Real-Wörterbuch aller Künste und Wissenschaften*, hrsg. von H. Frischer, microform (Frankfurt a. M. 1992), 1) ⑤記事の後半部に一部ドイツの「あやかお」が転載されている。
- (12) Leibniz, Gottfried Wilhelm: *Das Neueste von China (1697) Notissima Sinica*, hrsg. und übers. von Nestorath und Reinbothe (Köln 1979). (山下正男訳「最新中国情報」『ライプニッツ著作集』一〇巻、工作舎 一九九一年)
- (13) Leibniz (1979), S. 9-11.
- (14) E. J. ニイトン著、渡辺正雄他訳『ライプニッツの普遍計画』(工作舎 一九九〇年)、六六一―六八頁参照。
- (15) ニイトン、前掲書、一七八頁。
- (16) B. M. ボダルト＝ペイリー著、中直一訳『ケンプファーと徳川綱吉』(中央公論社 一九九四年)、二二―四五頁参照。
- (17) 原文の "…aller Christ- und Unchristlichsten Feinde..." (Brätigam (1993), S. 337.)とはフランスとトルコを指す。ライプニッツやケンプファーは、フランス王の尊称である「最もキリスト教的な王」を皮肉として用いている。
- (18) 森義信著『日本誌』と『法の精神』にみる海禁・鎖国論の読み方『藝林』第四一巻(藝林會 一九九二年五月)、二二頁。
- (19) 柴田陽弘著『ケンペルの鎖国観』『藝文研究』第八六号(慶應義塾大学藝文学会 二〇〇四年六月)、二七四頁。
- (20) 「ある民族がつきあいを嫌い、古代のエジプト人、現在の中国人や日本人のように、自分だけで、そして他民族から孤立して生きれば生きるほど、よりよくその国民性を維持するが、しかし、その分だけ国民の状態は不完全なままである」Kapitza (1990), s. 612.; Kapitza (2001), S. 40.
- (21) Herder, Johann Gottfried: *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit*, hrsg. von M. Bollacher, Frankfurt a. M. 1989. (田中英一郎／河合貞一訳『歴史哲学』第一書房 一九三五年)『日本については第三部一一巻で言及されている。第三部は一七八七年に出版された。
- (22) 『人類史の哲学考』の中で日本に関する記述は一頁に満たないのに対し、中国については二三頁にわたって記述している。ヘルダーは、中国文化を共有する周辺国は「精神的な部分で、中国の一地方である」(S. 442.)とした。その上で、彼は日本の文化も「中国人の助けを借りて登ったに過ぎない」(S. 444.)と述べ、日本が中国の影響下にあったことを指摘する。また、ヘルダーは、ケンプファーや『日本誌』に強い関心を持っており(vgl. Kapitza (2001), S. 8). 『人類史の哲学考』における日本の記述の少なさは、日本情報の不足によるものではない。
- (23) Herder (1989), s. 433f.
- (24) Herder (1989), s. 438.
- (25) 成瀬治他編『ドイツ史』第二巻(山川出版 一九九六年)、二二九頁参照。
- (おかの・かおる、比較文化論、東北大学大学院)